

『サーキット・スイッチャー』（安野貴博/早川書房）

書店員のレビュー抜粋

- ・自動運転車の技術が急速に発展した近未来の日本で、自動運転のアルゴリズムを開発するスタートアップ企業の社長が誘拐された。自動運転車内に爆弾を仕掛けたと語る犯人の目的は、合理性によって取りこぼれ落ちてしまった声を拾い上げようとするラストはとても感動的です。つねに昨日よりも今日読んだ時、よりリアルさを持って心に迫ってくる。そんな決して他人事にはならない未来が描かれている作品だと思いました。どうかこの作品がもっと広範のひとの手に届きますように。
- ・完全自動運転が実用化している近未来の話。AIの課題や倫理問題などがわかりやすく物語に織り込まれていてとてもリアルです。疾走感のある劇場型犯罪で映画を観ているようでした。
- ・面白かったです。先が気になって、一気に読めてしまいました。技術的な部分で難しいと感じる部分もありましたが、全体的には読みやすかったです。映像化してほしい！と思うような小説でした。
- ・自動車の自動運転が叶った世界！AIエンジニアでありチームみらい党首の安野たかひろが描いた近未来SF、純粋に面白いと思いました。
- ・最初から最後まで先が気になって一気読みしました。自動運転のアルゴリズムの開発者の坂本社長が最後に決断する場面がとてもよかったです。たくさんの人によんでほしい小説です。
- ・とても読みやすく、職場で時間を作り読んでましたが続きが気になって気になって。読み終わった後は気持ちがすっきりしました。
- ・自動運転実用化。今ではトヨタが実現に向けてひとつの町を実験しています。現実的な社会問題をたぢいざいにしているのでとても興味深く読めた。
- ・グイグイ読ませる勢いがある作品。専門用語の説明も知識がなくても分かりやすい。犯人の目的が分かってくると感情移入してしまい、より結末が気になる。
- ・安野貴博ってあのチームみらいの！？という驚き。テーマも現代に即したものだし受賞したら話題になりそう。北陸に一見ハマるかはわからない雰囲気だが、車社会だし人間味ある話だし化けそうと思った。

- ・クルマの完全自動運転が普通な未来の描写が実にリアル。専門用語の解説はぶっちゃけチンパンカンパンでしたが、ストーリーの疾走感がそれを補って余りある(期せずして韻を踏んでしまった…)。
- ・この本を読まずに書店員をしていたことが恥ずかしいくらいの傑作。AIの便利さや恐怖が身近になった今年、絶対に読むべき小説。
- ・とても読みやすく、職場で時間を作り読んでましたが続きを読みたい気になって。読み終わった後は気持ちがすっきりしました。
- ・近未来の話でありながら身近に感じられ、難しいこともわかりやすく、そこにテンポの良さも加わり、気付けば一気読み。
学ぶことが多かった。未来へのメッセージと信念を感じました。
- ・目隠ししてジェットコースターに乗せられているかのような緊迫感にしびれました。そして、その極限状態を生み出した背景・未来の社会問題も丁寧に描かれていました。これは予言書になるかもしれない…
- ・最先端のストーリーに乗せられて、たどり着いた先は人の哀しみ。読後、読んでいる間には予想さえしなかった静かで空白の時間が広がりました。
- ・コンピュータに詳しくなくても専門用語がどんどんてきて読めやすいままで、スピード感も感じられることに終始驚きながら読み進めました。確かにこの作品がベストセラーにならず埋もれているのはもったいないと思いました。
- ・専門的な技術が物語の核に据えられていながら、難解さより仕組みがわかっていく快感に、理系要素が苦手な私でも楽しく読めました。テンポも非常に良く、知的体験をしたい人オススメです。
- ・これからの未来、しかもものすごい近い未来に感じさせる書き方が魅力的に見えた。特に、自動運転の車の事故クレームなど、今現在でもどうなるのか話し合っているようなところに、一つの選択肢を感じる一作。